湯婆
懷爐

〔國花萬葉記六 攝津〕諸職商人買物所付

火燵櫓　道修町

〔守貞漫稿六 生業〕京坂ニ在テ江戸所無ノ、市街ヲ巡ル生業ニハ、○略中櫓直シ、

炬燵矢倉ノ古キ損ジタルヲ補ヒ、或ハ新製、或ハ古物ノ補ヒタルヲ擔ギ巡リテ、損破ノ櫓ト交易スルコト行燈ト同意、是亦定扮ナシ、蓋冬ノミ巡ルナリ、

〔書言字考節用集七 器財〕湯婆（タンホ）所呼唐音、韵府、暖足瓶也、一名脚婆、又曾文清呼爲錫奴、見詩林廣記、懷爐（クハイロ）

〔和漢三才圖會三十二 家飾具〕湯婆　太牟保、唐音乎、

按、湯婆以銅作之、大如枕而有小口、盛湯置褥傍、以煖腰脚、因得婆之名、竹夫人與此以爲寒暑懸隔之重器、

〔覆醬集四〕竹湯媼

辟寒重被臥茅齋、當與此君敎老偕、惟匪郫筒能貯酒、一團和氣滿吾懷、

〔羅山詩集五十 器用九〕和石丈山竹湯婆

箇樣軍持備小齋、煙湯酌注與吾偕、纏綿竟夜三冬暖、被底婆兒不免懷、

〔西鶴織留一〕品玉とる種の松茸

或時宵に燒たる鍋の下に、其朝まで火の殘りし事、是は不思議と燒草に氣を付けて見しに、茄子の木犬蓼の灰ゆゑに、火の消ん事をためして、是は人のしらぬ重寶と思ひ付き、手振で江戸へくだり、銅細工する人をかたらひ、はじめて懷爐といふ物を仕出し、雪月の比より賣ける程に、是は老人樂人の養生、夜づめの侍衆の爲と成り、次第々々にはやれば、後には御火鉢御火入の長持灰とて看板出し、大分うりて程なく分限になり、○略中林勘兵衛といふ名は、ひそかにしてのたのしやなり、